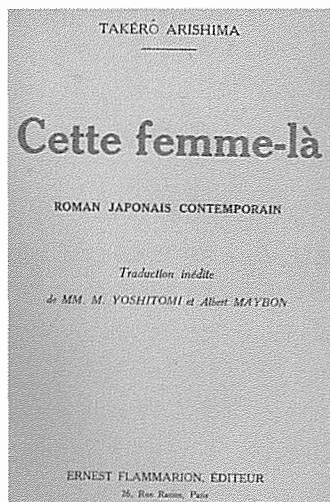


有島武郎に潜む政治性と外交性 ——フランス語訳『或る女(前編)』(1926)から

杉淵 洋一

はじめに



【資料1】フランス語版『或る女(前編)』(1926)の表紙。

TAKERÔ ARISHIMA

著作者名が、「アリシマ・タケオ」ではなく「アリシマ・タケロウ」となっている。

Traduction inédite

de MM. M. YOSHITOMI et Albert MAYBON

「好富(正臣)、アルベール・メーボン両氏による(フランス語)初翻訳」とある。

ERNEST FLAMMARION, ÉDITEUR

26, Rue Racine, Paris

最下部に、「アーネスト・フラマリオン出版社—パリ市ラシーヌ通り26番地」とある。

1919年3月、有島武郎の友人・足助素一が経営する創業間もない叢文閣より小説『或る女(前編)』が上梓され、1923年6月には、軽井沢・淨月庵で波多野春房の妻・秋子との巷間を騒がせた心中事件が起こる。それから3年の歳月を経た1926年、遠い異国の地・フランスはパリ市の書肆アーネスト・フラマリオン la maison d'édition Ernest Flammarionより、*Cette femme-là* (『あの女』^{セツト ファンム・ラ}¹) というタイトルでフランス語版『或る女(前編)』が、現代日本小説として翻訳出版されている。

拙稿「フランス語版『或る女(前編)』(一九二六)—翻訳に関する経緯とその可能性—」(有島武郎研究会編『有島武郎研究 第十二号』2009)において校者は、有島によるオリジナル・テキストとフランス語テキストの構造的な差異について検討を試みた。フランス語版は、翻訳される過程において、章の統合を含め、大きな削除、ないしは改編がなされ、言説の流れと直接関係のない文章は大幅に翻訳文からは取り除かれ、原著に対して極めてコンパクトなテキストになっている。その点については、乗り越えることのできない両言語の差異、または翻訳者の語学力、両翻訳者間における理解の齟齬に起因するところが大きい事を指摘した。

それらの削除、改編された部分に比して、ヒロイン葉子の内的心理描写に関わる多くの部分については、逐語訳に近い丁寧な翻訳が概ねなされている。特に愛人の倉地

1

邦題は校者による拙訳。

2

安川定男「有島武郎とベルグソン」『有島武郎論』明治書院 1967

との逢瀬に関係する部分は、過剰ともいえるような語数のフランス語が並べられている。この点について、安川定男氏による「有島武郎とベルグソン」²等の先行論を受けて、校者は有島のフランス語版『或る女(前編)』が、ベルクソン哲学、ないしは「生」の哲学に有島が強く感化されていたという前提の上で、原書以上にベルクソン哲学の理解を盛り込んだものになっているという仮説を提示した。

3

新渡戸稲造「哲人ベルグソン氏」『東西相触れて』実業之日本社 1928等を参照のこと。

またベルクソンは、有島相思相愛の師・新渡戸稲造の友人であり、新渡戸の国際連盟事務次長としての滞欧期間中(1919-1926)、二人の間には緊密な交流が存在していた³。新渡戸の滞欧中に有島の心中事件が起り、フランス語テキストが出た1926年に、新渡戸は事務次長としての任期を全うし、その任を弟子の杉村陽太郎に譲り帰朝している。こと有る事に有島の名前を最愛の弟子として挙げていた新渡戸が、ベルクソンとの交歓の中で、有島についての話をしていなかったとは考えにくく、有島テキストのフランス語訳には、単純に日本においてブームを巻き起こした作品という以上の理由が秘められている可能性が高い。1926年の翻訳は、当時、フランスに滞在、駐在していた有島を信奉する日本人、そして彼等や日本の文化に対して理解を示したフランス人達が織り成した集団による有島追慕の一様ではなかったのだろうか。

そこで本稿では、当時、彼の地に駐在していた邦人翻訳者・好富正臣^{よしとみまさおみ}とフランス人共同翻訳者であったアルベール・メーボン Albert Maybonの二人に光を当て、そこから派生して浮かび上がってくる人物達の間関係の分析と、その関係に有島が関わってくる余地についての考察を試みたい。

現在においては雑誌『白樺』の象徴的なメンバーの一人として安直に扱われてしまっている感のある有島武郎ではあるが、先述の新渡戸、弟弟子の鶴見祐輔といった当時を代表する国際派自由主義者たちとの深い交流は看過できるものではない。ましてや、有島における日本の近代化に担った本質的な役割を見極めるためには、西洋芸術、思想受容といった領域からの一辺倒なアプローチからではなく、有島が社会生活^{ナショナル}の場で構築していた人脈から国家的、または超国家的な意味^{トランスナショナル}におけるの捉え直しが必要不可欠である。

物理的事情によりアクセスが困難な資料や、一世紀近くの歳月の経過によって既に失われてしまった資料も多く、完全な再現図を描くことは不可能といえよう。しかしながら、過ぎ去って行った人々の情熱と誠実さがこのまま忘れ去られてしまうよりは、不完全であっても再現を試みる方が有意義と言えるのではないだろうか。

これまでの有島研究では、〈白樺派〉とは位相を異にする有島の国際的、政治的な人脈の重要性には余り目が向けられてこなかったきらいがある。有島研究の新たな地平を切り開き、日本の近代化の渦中にあった有島が担った国際性、政治性の顕在化への起爆剤として、フランス語翻訳テキスト『或る女(前編)』を手掛かりとする有島の人脈の再整理を本稿では目論みたい。

1. 刊行に至る迄の経緯とその特殊性

本稿で扱うテキストより興味を惹きさせられる点として、当時の遅々とした日本語からフランス語への翻訳事情に鑑みると、日本における原書の出版からたいへん短い期間で翻訳され、刊行にまで漕ぎつけている点が挙げられる。管見の限りではあるが、今日⁴に至るまでに欧米においては、英語による『或る女』⁵、『死と其の前後』⁶、ドイツ語による『小さき者へ』⁷、『カインの末裔』⁸などの散発的な翻訳を確認する事は出来るものの、他の高名な邦人作家の著作に比して有島の翻訳作品⁹は割合として数が少ない。フランス語圏に限れば、本稿で取り上げる『或る女(前編)』が唯一の単行本化された翻訳出版物となっているのが実情である。このような有島作品の欧米における芳しくない昨今の翻訳事情、受容の実態は、1926年のパリにおける『或る女(前編)』翻訳出版の特殊な経緯^{いままで}を逆説的に示唆する。

有島は1918年3月以降、主に第一高等学校、東京帝国大学の学生達を相手に、アメリカの詩人ウォルト・ホイットマンの詩集『草の葉』の講読と時事放談を主たる目的に麹町下六番町の自宅を開放して、私的サロン(草の葉会)を主宰している。この会の会員で、有島を文学の世界における日本人唯一の先生として慕う芹澤光治良の残した言葉が、この経緯の解明に一筋の光明を与える。芹澤は、『或る女』前後編がまとめて収録されている筑摩書房より1979年に出版された『有島武郎全集 第四巻』付属の月報に「『或る女』がパリで佛譯出版された時」なる文を寄せている。

1926年冬、芹澤は、パリに社会経済学の学生として留学し、当時、雑誌『レヴュ・ド・モンド』*Revue du monde*の編集長を務めていたアンドレ・ベルソール André Bellessort と、パリ16区ポアロー町48番地の下宿(パンシオン・ド・ファミユ)に同宿していた。ベルソールは、バルザック研究に代表されるフランス文学の大家であり、1897年から翌年にかけて日本を旅行し『明治滞在日記』¹⁰なる著作も残し、のちにフランス学士院の会員となる人物である。このベルソールから、ある晩、直近に二冊の日本の小説のフランス語訳がパリで出版されたことを芹澤は耳にする。一冊は、『*Avant l'aube* (『夜明け前』)なる仏題をつけられた賀川豊彦の『死線を越えて』であり、もう一冊が、師・有島武郎の『或る女(前編)』であったので、たいへん吃驚した旨が芹澤回想文には記されている。

文中、芹澤は、「アリシマの崇拜者である若い日本人の官吏がパリに留學して、フランス語の勉強のつもりで翻譯したのを、フランス語の先生が佛文に手を加えて共譯者になっている」¹¹と、翻訳作業の過程についても僅かではあるが書き残している。ここで名前の挙がる「若い日本人の官吏」が好富正臣で、『或る女(前編)』のフランス語翻訳当時は、新進気鋭の外交官であった。それから17年後、1943年4月7日付『読売新聞』朝刊一面には、汪兆銘率いる国民政府政権下の南京からの特電として「好富南京総領事」の見出しで死亡記事が掲載されている。記事は、弱冠45歳であった好富が、前日の午後、当地の同人会病院において病死したことを伝える。記事の中盤から後半にかけて好富の簡単な経歴が併記されており、大戦の終結を待つことなく大陸で夭折したフランス語に堪能な日本人外交官の大まかな足取りを辿ることができる。

その経歴によると、「氏は大正十二年(1923年)東大政治科卒業、外務省在外研究

4
2010年8月現在

5
A Certain woman, University of Tokyo Press, Tokyo, 1978. Tr. Kenneth Strong.

6
Death, *New plays from Japan*, Ernest Benn, London, 1930. Tr. Yozan T. Iwasaki and Glenn Hughes.

7
Meinen Kleinen, *Moderne Japanische Erzählungen*, Gustav Langenscheidt jr, Berlin, 1942. Tr. Oscar Benl.

8
Ein Nachkomme Kains, *Japanische Erzählungen des 20*, Theseus verlag, München, 1992. Tr. Jürgen Berndt.

9
他に英訳「生まれいずる悩み」、「迷路」、独訳「宣言一つ」等を確認できるが、何れにしても散発的な出版であって、彼地において有島の作品が人口に広く膾炙したとは言い難い。

10
新人物往来社1989(大久保昭男訳), *Le Nouveau Japon*, Perrin et Cie, 1918.

11
芹澤光治良「『或る女』がパリで佛譯出版された時」『有島武郎全集 第四巻 月報』筑摩書房1979, p.2.

12
「好富南京総領事」『読売新聞』1943年4月7日付朝刊一面 ※括弧内は校者注。

13
Les Conflits nippon-américains sur l'immigration japonaise, J.Aubert, 1926.

14
(フランス語原題) *Étude sur l'histoire économique de l'ancien Japon : des origines à la fin du XIIIème siècle*, A.Pedone, 1927. ※本稿における好富正臣によるフランス語書籍の原題は全て校者による拙訳。

15
Japon et sa civilisation, Xavier Drevet, 1924.

16
Anthologie de la littérature japonaise contemporaine, Xavier Drevet, 1924

17

Femmes japonaises et leur littérature : critique, roman, théâtre, souvenir, H.Chariot, 1924.

18

戸部良一「皇道外交」『外務省革新派』中公新書2010, pp.75-76.

19

La Politique chinoise, Giard et Brière, 1908.

20

La Vie secrète à la cour de Chine, Juven Felix, 1910.

21

L'Indochine, Larose, 1931.

22

Le Théâtre japonais, Henri Laurens, 1925.

23

「『いき』の身体的発表はおのずから舞踏へ移っていく。その推移には何らの作為も無理もない。舞踏となつたときに初めて芸術と名付けて、身振と舞踏との間に境界を立てることにかえつて作為と無理とがある。アルベール・メーボンはその著『日本の演劇』のうちで、日本の芸者が「装飾的および叙述的身振りに巧妙である」ことを語つた後に、日本の舞踏に関して次のようにいつている。「身振によつて思想および感情を翻訳することについては日本派のもつてい知識は無尽蔵である。……足と脛とは拍子の主張を明らかにし、かつ保つ役をする。軀幹、肩、頸、首、腕、手、指は心的表現の道具である。」(Albert Maybon, *Le Théâtre japonais*, 1925, pp.75-76)。我々はいま便宜上、「いき」の身体的発表を自然形式と見て、舞踏から離して取扱つた。」九鬼周造「四『いき』の自然的表現」『『いき』の構造』岩波書店 1930, pp.85-86.

24

Le Japon d' aujourd' hui, Flammarion, 1924.

25

L'Empéreur du Japon, Mercure de France, 1927.

26

Les Temples du Japon : Architecture et sculpture, E. De Boccard, 1929.

27

Une Parenté entre basques et japonais ? : Art et médecine Deuxième année. No.4, Corps Médical, 1931.

生としてパリ大学に学びフランス大使館、ベルリン大使館、ソ連大使館等を経て昨(昭和)十七年(1942年)、新京総領事に転じ大使館一等書記官となり南京着任。情報部長として敏腕を奮い昨年十月大東亜省設置と同時に参事官に榮進、南京総領事を兼ねて情報部長として国府参戦化の言論指導に名声を博した。』¹²とされる。内閣印刷局発行の官僚名簿である「職員録」にあたると、1928年発行以降、外務省在仏国大使館外交官補や、情報局事務官などとして帰朝した好富の名前を確認することができる。これらのことから好富は、在外研究生から在フランス日本大使館の参事官へ昇任する過渡期にかけて、『或る女(前編)』のフランス語訳の作業を行っていたと理解されよう。

翌1927年にはソルボンヌ大学に、「日本人移民に関する日米折衝」¹³、「古の日本における経済史についての考察—始原から12世紀の終わりまで—」¹⁴という題目で二本の博士論文を提出する。このフランス駐在の間に好富は、『日本とその文明』¹⁵、『日本現代文学アンソロジー』¹⁶、『日本人女性とその文学』¹⁷というタイトルで少なくとも3冊の書籍をフランス語で執筆している。また、帰朝後の1934年7月、外務省調査部長に栗原正が就任した際には、好富は仁宮武夫等とともに調査部に配属され、外務省革新派のリーダーと目されていた白鳥敏夫の影響の下、革新的少壮外交官として皇道外交理論化の一端を担ったとされる¹⁸。



【資料2】

1917年12月17日発行の『極東時報』第46号の表紙・中央部分の写真は仏国帆船クレベール号と生存者の乗務員と説明されている。

また一方、芹澤から「フランス語に手を入れた」とされる好富の共同翻訳者アルベール・メーボンも、フランスと日本、ないしはフランスと東アジアの関係を巡る資料の中でしばしばその名前を見つけることができる。メーボンは、

当時のフランスにおけるアジア学研究の第一人者であり、『中国の政治』¹⁹、『中国の宮廷における知られざる生活』²⁰、『インドシナ』²¹等の著作を仏文で残している。中でもメーボンの仕事として特筆すべきものは、日本文化に関連したもので、この碩学のフランス人による著作『日本の演劇』²²の一節は、九鬼周造によって、『『いき』の構造』第4章の中で、舞踏における「いき」の表出について説明する際に参照されている²³。その他、『今日の日本』²⁴、『日本のエンペラー』²⁵、『日本の寺院—建築と彫刻—』²⁶、『バスクと日本の親縁性』²⁷といった、モチーフを日本に求めた著作で筆を振っている。読売新聞の記事でメーボンは、「フランス象徴派の流れを汲んだ詩人」²⁸とも紹介されており、ジャーナリズム一辺倒の人間ではなく、文学、芸術の領域においても相当の見識を持った人物であったといえよう。

2. 日本人翻訳者・好富正臣から浮かび上がる有島の政治性、外交性

ここから、翻訳者二人のそれぞれの人間関係を明らかにし、その関係と有島との距離を分析することによって浮かび上がってくる人間の集まり、ないしは作り出す空間が、当時の日本社会に対して担った役割、与えた衝撃について考察を加えたい。

34
同前

芹澤光治良は、先述の回想文で、「その譯者も草の葉會の會員の一人であろうと、先輩だった東大生を幾人も思い出したが、ヨシトミという人は思い当たらなかった」³⁴と当時を振り返っている。この一文は、好富が〈草の葉會〉の中心メンバーではなかった事を断言するものたりえるだろう。

35
八木澤善次「有島先生と草の葉會」(1929・9・5日於淺間高原千ヶ瀧)『有島武郎全集』「月報 第六号」新潮社1929(有島武郎研究会編『有島武郎研究叢書第十集』右文書院1996, p.228.)

しかしながら、好富は芹澤の東大の一年後輩であり、芹澤が好富を先輩と考えている点は、明らかな事実誤認といえる。八木澤善治は、1918年、秋「頃から草の葉會は會員の数が非常に殖えたが、しかしそれと同時にホキットマン研究の会でなくなり、雑談の會、謂はば先生を中心とした若い学生の集まりと化し、最初の會員は殆んど顔を見せなくなつてゐた」³⁵と、〈草の葉會〉に集うメンバーの劇的な変遷について言及している。のちに作家・大佛次郎となる文芸部員の野尻清彦が、「法科、政治学科の学生の発言が多かつたようで、文学派はおとなしく聞き手に廻っていた。」³⁶と残しており、政治学科の学生であつたことが確認できる好富が、初期のメンバー達の多くが去つた後の〈草の葉會〉に参加していた可能性を軽々に排除することは出来ない。

36
大佛次郎「私の履歴書」『日本經濟新聞』1964

一高の寮誌『向陵誌』の「文芸部部史」欄に、1920年に発行された『校友会雑誌』第279号についての内容説明を見つけることが出来る。そこには、「卷末の「群集心理と歴史の解剖」は好富正臣氏の作、最初に群集心理の如何なるものであるかを説いて、心理眼に映ずる仏蘭西革命及び支那第一革命に論及している。」³⁷と書かれており、この時点において、好富の中では既に文芸と外交を結ぶ線が出来上がっている。この線の延長として、好富が、一高、東京帝大生の間で話題となつて、「当時の動揺した社会情勢を反映して」「社会問題の話が多かつた」³⁸とされる有島の〈草の葉會〉に、少なからぬ興味を持っていたと考えるのは妥当といえよう。

37
「文芸部部史」『向陵誌』第一高等学校寄宿寮編1930, p.328.

38
大佛次郎「私の履歴書」同前

ここで、〈草の葉會〉と同様に、有島の友人・鶴見祐輔が麻布の自宅で催していた私的サロン〈火曜會〉にも目を向けてみたい。一高弁論部を基盤とした〈火曜會〉の設立経緯については、弟子であつた北岡寿逸じゅういつによる「鶴見祐輔さんの思い出—火曜會を中心として—」という文章に詳しい。「アメリカでウイルソン大統領選挙戦の最中、鶴見邸に招かれ、ウイルソンの理想主義の話、鶴見さんがウイルソン伝を書く事を終生の仕事としている事などの話があり、誰が発したのか「今度の選挙でウイルソンが勝つのですか」との質問に対し、鶴見さんは例の通りの極めて歯切れのよい調子で「それは負けです」と言い切つて、その理由として、アメリカでは財界、新聞界を握っている共和党が強くて、この前の如く(ウイルソンの)民主党が勝つたのは例外なる事を滔々と述べた。すると、つむじ曲りの沢田謙が早速起つて「私はウイルソンが勝つと思う」と云つた。その理由は極めて簡単で、政治と云うものは玄人の予想とは反対に出る。殊に鶴見さんの予言は外れるのを常とするので、私はウイルソンが勝つと思うとやつた。

それでは賭けようということになって、ウイルソンが勝てば鶴見さんが吾々を御馳走する。ウイルソンが負けたら吾々が鶴見さんを御馳走すると云う事が決まった。(略) 米国政治の専門家鶴見さんの予言は見事に外れて、ウイルソンが勝ったので、(1916年一校者注)十二月十六日吾々は鶴見邸に招かれる事となった。(略)種々話(何故ウイルソンが勝ったかと言う説明も明快であった)の末、この会を続けて月一回鶴見邸に催そう、会名はその日が火曜日であったから「火曜会」とするが、ウイルソンの理想主義に憧れ、その再選祝賀会の日に誕生したから、外国名は「ウイルソン倶楽部」と呼³⁹ぶ事になったとされる。

回想文中には、当日の参会者の名前⁴⁰も併せて列挙されており、鶴見の予想が外れると豪語した澤田謙、市河彦太郎、蝦山政道という有島武郎と所縁のたいへん深い三人の名前が見つけられる。この三名は、1929年に書かれた八木澤善次の「有島先生と草の葉会」によって、「大正六年(1917年一校者注)の三月、私が御訪ねした時友達を連れて来てよいかと先生(=有島一校者注)に御聴きしたら、「何卒」といふばかりではなく、是非若い学生諸君と御会ひしたいから連れて来るやうにとの御希望だったので、私は早速一高の寄宿舎に帰つて其の夜遅く市河彦太郎一今は米国駐在の領事に話し、翌日蝦山政道君一今の帝大法学部教授一に語つて賛成を得、更に当時の私達の先輩として敬愛してゐた既に大学生であつた澤田謙君を誘つて、何日だったか日ははつきり記憶してゐないが三月の或夜四人揃つて訪問し、夜の更くるのも知らず語つた時、ホイットマンの詩と一緒に読もうということになり、それが切つ掛けとなつて出来たのが草の葉会である⁴¹とされ、有島の〈草の葉会〉を創設したメンバーでもあることがわかっている。

また、創設会員のみに留まらず、この二つのサロンには重複する参加者が多く、芹澤光治良の名を挙げるまでもなく、火曜会の主要メンバーで鶴見祐輔の実弟にあたる鶴見憲⁴²、会の幹事であつた先程の北岡等有島の〈草の葉会〉にも参加していたことが確認できる。鶴見祐輔の姪・加藤シヅエも〈火曜会〉の会員であつたが、興味深いことに、加藤の親友・波多野秋子も同会のメンバーとして名を連ねている。

鶴見が、「有島君は私が自分の家で開いてゐる火曜会といふ学生の会によく来られて、話をしたり、傍聴したりされました⁴³と振り返り、平野義太郎も「わたしなどはこの会での講演を機に、有島武郎さんの邸を訪れたこともあつた。」⁴⁴と残している。これ等の言説は、両サロンにおける、他の学生サロンとは趣を異にする、先天的と言っても過言ではないような根の深い人間関係の親和性を物語るものである。

有島と鶴見の大きな共通点として真っ先に挙げられるのは、数多に存在した新渡戸稲造の弟子達の中でも、新渡戸から特に目をかけられていた掛け替えのない弟子の二人であつたということである。有島と鶴見の出会いについては、鶴見が残した「訪れてゆく心」という『読売新聞』に連載されたエッセイの中で触れられている。同様に新渡戸の愛弟子であつた鶴見の一年先輩になる前田多門とともに、文京区小日向台の新渡戸の邸宅を訪れた際の「新渡戸先生」という部分に詳らかに描かれている。そこには、「女中の案内で中へはいると、先生のほかに、いま一人若い紳士が居るだけである。まづ、ほつと安心して立ちむかふと、先生が、「よく来たね。暑いぢやないか」で気軽に椅子をたたれて、『御紹介しよう、これが今度亜米利加から帰つたばかりの有島

39

北岡寿造「鶴見祐輔さんの思い出一火曜会を中心として」『友情の人鶴見祐輔先生』1975, pp.61-62.

40

他に河合栄治郎、川西実三、蘆野弘、平野義太郎、鶴見憲、瀧川政次郎等の名前が挙げられている。

41

八木澤善次「有島武郎先生と草の葉会」同前, pp.225-226.

42

鶴見祐輔が和子、俊輔姉弟の実父である事は広く知られているが、鶴見憲は祐輔の末弟にあたり、のち外交官として要職を歴任した。また、人類学者・良行の実父にあたる。祐輔と憲は年齢が離れていたため、祐輔はこの弟を自分の子供の様にして可愛がつたとされる。

43

鶴見祐輔「有島武郎君を想ふ」『有島武郎全集 月報 第五号』新潮社1929(有島武郎研究会編『有島武郎研究叢書 第七集』右文書院1995, p.256.)

44

平野義太郎「火曜会」のこと『友情の人鶴見祐輔先生』同前, p.104.

45

鶴見祐輔「訪れてゆくところ 九、新渡戸先生(下)」『読売新聞』1923年8月6日付朝刊3面

武郎君』と言つて、我々を紹介された。ああ、これが有島さんといふ人なのか、と自分は心の中で思つて、しげしげとその若い紳士をみた。先生はそれ迄に、札幌農学校の教授時代の話を幾度かされた。そして、そのたびに『有島が、有島が』と、自分の子のやうな親しみをもつて話されたので、自分たちも、いつの間にか、兄弟子に対するやうな親しみをもつて、この人の名を記憶するやうになった⁴⁵とある。この鶴見の回想は、文末に、「この一文をジュネーブに使用する前田多門君に送る」という一言が添えられており、1920年の国際連盟の設立に際して事務次長に就任した新渡戸の後を追いかけるようにして、1923年、内務省より懇願され国際労働事務局(ILO)日本政府代表としてジュネーブに赴任した前田多門に捧げられた文章であることが分かる。この鶴見の言葉の内に、新渡戸と同じ場所で仕事をするのが許された前田への羨望の気持ちが少なからず込められていることは間違いない。信奉する弟子たちにとっての新渡戸の存在は、学問上の師匠と弟子という関係を遥かに超えて、信仰といってよいほどの強い精神的紐帯で結びついたものであった。〈草の葉会〉と〈火曜会〉の親和性の強さの背景にも、無論、新渡戸稲造の存在が軸として大きく作用していたといえよう。新渡戸自身、小日向台の自宅において、一高、東京帝大の学生を中心に集めて〈あぜりや会〉等を開催しており、有島の〈草の葉会〉、鶴見の〈火曜会〉は、国際的な感覚を備えた若手の育成を主意としていた新渡戸サロンの踏襲といった意味合いが強い。また、〈火曜会〉という名前の由来となる第28代アメリカ大統領ウッドロー・ウィルソンは、新渡戸のジョンズ・ホプキンス大学時代の学友でもあり、鶴見のウィルソンへの私淑は、新渡戸への尊敬の念の延長線上に存しているといつて差し支えない。

46

鶴見祐輔から見ると芦田均は、一高弁論部の一年後輩にあたる。

ここで有島武郎と『或る女』のフランス語翻訳者・好富正臣とを繋ぐ一糸として、好富の先輩であり、外務省では同僚であった、〈火曜会〉において有島と座談を行った第47代内閣総理大臣・芦田均⁴⁶の存在に焦点を当ててみたい。芹澤光治良が長興善郎に問いかける形で書いた、長興の小説『女婿教育』への1936年3月に『報知新聞』に掲載された文芸時評に次のような一節が見られる。「君は覚えてあるだらうか、鶴見祐輔氏のサロンに、火曜会といつて一高と大学の学生が集まつてゐたが、いつも座談で喜ばれたのは小説家だつたことを。ある時、当時最も青年の心を掴んでゐた作家、有島武郎氏と駐露大使館の新鋭な書記官芦田均氏が座談(コーズリー)をしたことがある。」⁴⁷

47

芹澤光治良「文芸時評(3)女婿教育の味」『報知新聞』1936年3月4日

何故、芦田は鶴見主宰の〈火曜会〉の座談において、座談の論客となったのだろうか。題名自体、芦田が一高において新渡戸の薫陶を強く受けたことを示唆させる評伝『最後のリベラリスト・芦田均』には、「当時、芦田より一年先輩の鶴見祐輔とは、以来半世紀以上の交友を保つのだが、鶴見は当時の芦田の印象を「芦田君の演説の文句のいくつかを、いまでも憶えている。後に、国会討論の達人となったが、論理的な牙はあの頃からあった」⁴⁸とある。演説の天才と目されていた鶴見が、芦田の演説について手放しに称賛しているのである。また、岩波書店刊行の『芦田均日記 第一巻』に収められた進藤栄一による解題によれば、「芦田は、第一次「新思潮」同人となって、漱石門下生たち一安部能成や小宮豊隆、谷崎潤一郎らと共に新しい文学運動に参加していた」⁴⁹とされてもいる。芦田は、学生時代には漱石を囲んで議論を交わし、『新思潮』に寄稿をしていた文人肌の文学青年であったのである。

48

宮野澄「渾る自由の血潮」『最後のリベラリスト・芦田均』文藝春秋1987、p.21.

49

進藤栄一「解題」『芦田均日記 第一巻』岩波書店1986、p.21.

1911年3月、芦田が翻訳したアナトール・フランスの「パンテオンの対話」の掲載がきっかけとなって、第二次『新思潮』第七号は発禁処分を受けていることなども、芦田の文学への傾倒の深さと、日本の文学史に果たした役割の大きさを物語る。これ等の事から、鶴見が主宰する〈火曜会〉における作家・有島武郎との対談者として、鶴見の後輩・芦田に白羽の矢が拳がったことは自然の成り行きであったといえよう。

その芦田は、東京帝大法学部フランス法科出身で、1911年9月に高等文官試験外交科外交官及び領事館試験に合格し、翌年、ロシア大使館外交官補の職を拝命する。あたかもその経歴をなぞるかのよう⁵⁰に好富は、1923年、高等文官試験外交科に合格、外務省在外研究生としてフランス留学を拝命する。芹澤光治良も、帝大では経済学部の学生であったものの、一高時代は仏法科の出身であり、彼の農商務省を辞してのフランス留学も、パリの日本大使館を筆頭に、フランスに学生時代の知友が多かったという理由が少なからずあった事が本人の随筆⁵⁰等より知られる。当時の官僚世界における一高、東京帝大における所属の学科、部は、今日のそれ以上に、卒業後の人生を大きく作用する要素となっており、芦田、好富、芹澤の三人はその流れの中で、それぞれが半ば必然的にフランスという地を踏んでいたといえる。

そして、芦田と有島が〈火曜会〉において座談を行ったと考えられる1918年、芦田は3年半にわたるロシアでの外交官補としての仕事を全うして1月に帰国し、4月に書記官として新たな任地パリへと赴任している。先程の芹澤の時評から推測するに、外交科の高等文官試験を翌年に控える好富が、これから自分が進んで行こうとする外交畑においてエース格の先輩・芦田と、人気作家として人口に広く膾炙していた有島の火曜会での座談を拝聴していた、または、芹澤の預からぬところで、芦田を通じて有島に直接会っていた可能性は大いにありえよう。

鶴見祐輔は、「有島君の喪失は、永久に補うことの出来ない欠陥を私の胸の中に残しました」⁵¹と、有島と波多野秋子との情死事件がもたらした大きな衝撃を公言して憚らなかつた。同様に、好富にも有島の真摯な姿を目の当たりにする機会があつて、その際に抱いた強烈な有島の存在感が伏線となり、フランス語訳『或る女』を1926年にパリで出版させたのではないだろうか。

50

芹澤光治良「第四章 私の青春時代」『人生について・結婚について』新潮社1967、pp.133-220。

51

鶴見祐輔「有島武郎君を想ふ」『有島武郎全集 月報 第五号』新潮社1929（有島武郎研究会編『有島武郎研究叢書 第七集』同前）

3. フランス人翻訳者アルベール・メーボンから浮かび上がる有島武郎の政治性、外交性

共訳者のアルベール・メーボンに関しても、この人物を起点として有島に連なる人間関係には多くの興味深い点が見受けられる。メーボンは滞日期間中、極東時報社社長として、積極的に日仏交流を目的とした会合等のイベントに参加している。注目すべきは、フランスの士官学校に留学した経験を持つ閑院宮戴仁親王が総裁、フランス大使のルーニョーが名誉総裁をつとめる〈日仏協会〉にしばしば顔を出している点である。日本人協会には、寺内正毅首相、本野一郎外相、松室到法相といった、有力政治家の名を見つけることができる。⁵² 1917年12月、暁星学園において催された、仏蘭西文学会創設一周年を記念した晩餐会で撮影された写真には、メーボンが内藤濯、広瀬哲士、太宰施門といったフランス、フランス学に造詣の深い本邦の知識人等と

52

『日仏協会晩餐会』『読売新聞』1917年3月28日付朝刊2面

53
「仏蘭西文学会の人々」『読売新聞』1917
年12月2日付朝刊7面

54
黒田清輝『黒田清輝日記 第四巻』中央公
論美術出版1968

55
アルベール・メーボン「文学者としての
クロオデル大使を迎ふ」*Arrivée de Paul
Caudel*『読売新聞』1921年11月20日
付朝刊7面

56
「日仏学芸界握手の企て」同前

57
映像資料『ある青春の碑—回想「種蒔く
人」』(秋田放送制作・1977年放送)

58
小牧近江「有島武郎さんのこと」『種蒔く
ひとびと』かまくら春秋社1978, pp.70-
76.

59
泉谷は有島武郎の号。

ともに写っている。⁵³ また、1910年代後半の黒田清輝の日記にも、メーボンの名前が頻出している。⁵⁴ このように当時の資料から、このフランス人の周辺に集うジャンルを越え幅広い層にわたる日本人達の姿が浮かび上がる。

日本におけるメーボンの肩書は、極東時報主筆兼社長のみならず、当時のフランスにおいて権威のあった新聞『ル・タン』*Le Temps*在東京特派員や、神田小川町の仏蘭西書院院主などを確認することができる。特派員としては、1921年にポール・クロオデルがフランス大使として日本に着任した際、「文学者としてのクロオデル大使を迎ふ」⁵⁵なる、政治の枠組みを超えて、日本の芸術家、有識者が、詩と理想との大使、精神上の友人としてクロオデルを迎えることによって、日仏の交流を発展させる契機となる事を祈る記事が『ル・タン』、五来欣造により日本語に訳され『読売新聞』に掲載されている。

また、仏蘭西書院院主としての仕事としては、書院の「読書室を公開して、広く仏国新聞、雑誌、芸術名品の閲覧に供し、尚一週一回、メーボン氏夫妻が中心となって、仏語談話会を開き、仏国学芸会の消息を漏らし併せて仏語研究上の便宜を図る」⁵⁶とある。仏蘭西書院には、日仏両国の学術団体の交流や、書籍の翻訳などによって思想上の相互理解を測ろうとする後援会が併設されていた。1921年3月4日の会合には、『読売新聞』に掲載されるメーボンの記事に日本語訳を施していた吉江喬松、ヨーロッパにおいてアナキストとして著名であったフランスのルクリュ家と深い交際のあった石川三四郎の名前を見つけることが出来る。また、在仏日本大使館で芦田均が二等書記官を務めていた時期に、代議士であった父・近江谷栄次が当時の特任全権フランス大使の石井菊次郎と友人であったのが縁で、大使館に住み込みで囑託職員等をさせてもらっていた小牧近江(本名・近江谷嗣)も出席者として名を連ねている。

この日本を代表する社会運動家の3人は、雑誌『種蒔く人』の主要執筆者として広く知られた人物達でもある。1919年、小牧は、足掛け10年にわたって滞在したフランスから帰朝し、雑誌を発刊するために人間主義者として憧れていた武者小路実篤を訪ねる。しかし武者小路から、「俺は団体行動はやらない。だから、それならタケロウさん、つまり有島武郎にあつたら一番よく了解するだろう」⁵⁷と、回答される。その言葉が切っ掛けとなって、小牧は有島邸に足を運ぶようになり、有島から精神的のみならず、経済的にも援助を度々受けている。⁵⁸ これらの事を考慮すると、好富から『或る女』のフランス語への共同翻訳を持ちかけられ、メーボンが了解した時までには、先程述べたような日仏友好のための組織や人物等を通じて、有島武郎という人間に関する予備知識を、メーボンは相当に持っていたといえよう。離日後のメーボンには、フランスの思想や文化を日本に持ち帰り、自身とともに普及させようと協力し合った親しい日本人達の恩に、何らかの形で報いようとする思いが強かったはずである。

1926年8月、『愛する人々へ』というタイトルの、有島武郎が遺族へ宛てた生前の消息文を中心にした編纂された遺稿集が、有島の実弟・佐藤隆三の手によって刊行される。その「跋」において、有島生馬(本名・壬生馬)が、兄・武郎の死の「三周年にあたつて、井東憲氏の「有島武郎の芸術と生涯」[泉谷遺墨集]⁵⁹及び好富正臣、メイボン二氏共訳の*Cette femme-là*(=『或る女(前編)』一校者注)と前後して本書が世に出たことは、過ぎ去つて行つた旅人が偶然路傍に落とした物品を拾い上げて、

61

北岡寿逸「鶴見祐輔さんの思い出」同前、
平野義太郎「「火曜会」のこと」同前

の専門家を講師として招聘した。しかしその一方で、真に優れた人間というものは万能であり、自分の専門以外のことであっても深い見識を持っていなければならないとして、有島武郎、島崎藤村、徳富蘇峰、杉村楚人冠、小山内薫、菊池寛といった所謂文人も積極的に会に呼び、学生達に交流の機会を持たせた。⁶¹

このような鶴見の気配りは、好富の『或る女』のフランス語への翻訳に象徴される日本文学、芸術の海外進出の起爆剤となったであろう。また、この〈場〉こそが、当時において国際的といわれた日本人達の中で、文学、文化を解する者が、積極的に海外の文学、芸術を日本に導入する前衛であったといえる。

62

テリー・イーグルトン「文化の諸相」『文化とは何か』(2000)松柏社2006, p.18.

テリー・イーグルトンは、「人間性から文化へ、文化から政治へという道筋を主張することは、その政治的偏向性から、現実の動きはその逆であることを露呈することとなる一つつまりまず政治的利害があり、それが通常、文化的利害を左右し、そしてそうするなかで特定の人間性のかたちが規定されるのである」⁶²と述べている。はじめに西洋芸術を受容するための専門集団のようなものがあつたのではなく、そのような工房的なグループは、国と国とを結ぶ国際的な政治の場から派生的に生成されてくるものである。有島武郎も、白樺派の作家、つまり初めに作家・有島ありきとして捉えるのではなく、国際政治、外交の場との距離から有島の居場所を見つけていくことによってこそ、有島という作家が日本の近代、及び近代文学に担った役割はより鮮明に例証できるのではないだろうか。

63

ロベルト・エスポジト「自由と免疫」『近代政治の脱構築—共同体・免疫・生政治—』(2008)講談社2009, pp.131-132.

近代政治哲学への反省、警鐘として、ロベルト・エスポジトは以下のように語りかける。「哲学は遠まわしなやり方で政治というカテゴリーを問いただしたり、背後から把握したり、それらの後ろ側にある壁、予期せぬ空間にさかのぼることができなかったようである。あらゆる政治概念には、光に照らされ、直接目に見える部分がある反面、ぼんやりとした領域、円錐形の影の部分もある。」⁶³と。そしてエスポジトはその渦中であつて、照らされた光によって眩惑され、影のゾーンを見失ってしまっているが、「この影のゾーンこそが意味の領域を構成しているのであつて、それは、平明なその内容とは何ら一致しないのである。なぜなら、政治的概念の平明な内容は、つねに一義的で、単線的であり、自己完結しているのに反して、それらの意味の背景は、もっと複雑で、しばしば矛盾し、相対立する二律背反的な要素を含みかねないもので、いっそう含蓄ある意味作用を獲得しようと葛藤しているのである。」⁶⁴と自身を定義づけている。

64

同前

近代日本文学の研究傾向においても、少なからずエスポジトと同様のアンチテーゼがなされてしかるべき時期を迎えていると考える。その狼煙を上げるといふ意味において、有島の『或る女(前編)』が一九二六年にパリで、好富正臣とアルペール・メーボンによりフランス語に翻訳され出版されたテキストの成立をめぐる蠢いていた周縁人物達の政治性の〈影〉の部分の分析は看過できるものではなく、その翻訳出版の意義は深大であつたといえる。

【付記】本稿は、日本比較文学会第27回中部大会(2009年5月名古屋大学)における口頭発表「翻訳者から浮かび上がってくる有島武郎の〈政治的〉人脈」に準拠し、執筆にあたり、加筆、並びに修正を施したものである。